

● 譜例3 第1楽章 第1主題



● 譜例4 第1楽章 第2主題



ラフマニノフ (1873-1943)

ピアノ協奏曲第3番 二短調 作品30

オーチャード

- I アレグロ・マ・ノン・タント(約15分)
- II インテルメッツォ:アダージョ
(約10分)
- III フィナーレ:アラ・ブレーヴェ
(約14分)

セルгей・ラフマニノフはロシア生まれの作曲家、ピアニスト、指揮者である。彼は20世紀に活躍しながらも、同時代に存在した前衛的な音楽に染まらず、伝統的で保守的な調性音楽を書き続けた。また、彼がピアノの名手であったことはよく知られており、そのヴィルトゥオーソ・ピアニストとしての実力は、今日市販されている自作自演の音源からもうかがうことができる。

ラフマニノフは、バガニエーニの主題による狂詩曲を含めると、ピアノ協奏曲を全部で5曲残しているが、本日演奏されるのはそのうちのピアノ協奏曲第3番である。

1909年の夏、同年秋に予定されていたアメリカでの演奏旅行での初演を目的に作曲された。ラフマニノフは、この作品のソロ・パートを、ロシアからニューヨークまでの船旅中に、音の出ない鍵盤を使って、短時間のうちに習得し、覚え込んだという。

この作品は、ラフマニノフの他の協奏

曲と比べて、技法が円熟していると評されるが、その理由のひとつには、第1楽章で提示される第1主題【譜例3】と第2主題【譜例4】が他楽章でも変形されて用いられていることも関係しているだろう。

初演は1909年11月28日、ニューヨークにて、作曲家自身によるピアノ、ウォルター・ダムロッシュ指揮で行われた。翌年には同じく作曲家自身によるピアノ、グスタフ・マーラー指揮でも行われた。

第1楽章 二短調、4分の4拍子。ソナタ形式。この楽章は大きく分けて提示部ー展開部ーピアノカデンツァー再現部から成る。これらは進行していく部分の順に小節数が短くなっていく。

提示部は2小節の序奏のあと、第1主題がピアノによってオクターヴのユニゾンで奏される【譜例3】。この主題はロシア正教会の聖歌から採られたという説もある。その後6度上の変口長調へと転じ、第2主題の萌芽が軽快なリズムをもって登場、のちに甘美な第2主題となる【譜例4】。展開部は再び二短調になるが、すぐさま転調される。ピアノカデンツァは通常のものより長く、この楽章の頂点にもなっている。ピアノカデンツァのなかには

第1主題や第2主題も登場する。再現部は他の部分と比べると極端に短く（小節数でいうと、提示部の約4分の1の長さ）、再現部というよりはむしろカデンツァのあとの終結部のような趣となっている。

第2楽章 イ長調、4分の3拍子。変奏曲風。この楽章は調号の上ではイ長調であるが、実際は第1楽章に引き続きニ短調で、オーボエによる憂いをおびた下行の主題で始まる。この主題はつづく変ニ長調の穏やかな部分、ヘ短調の激しい部分でも形を変えずそのまま登場する。旋律がそのまま形を変えず何度も繰り返されるのは、ロシアの変奏の特徴である。このヘ短調の部分では、ピアノの大音響に隠れて、密やかにヴァイオリンによって第1楽章第1主題【譜例3】の変形も登場する。ピアノによる力強い装飾音付きの動機から第3楽章への移行部となり、切れ目なくそのまま第3楽章へと続かれる。

ブラームス(1833-97)

交響曲第4番 ホ短調 作品98

- I アレグロ・ノン・トロppo(約12分)
- II アンダンテ・モデラート(約11分)
- III アレグロ・ジョコーソ(約6分)
- IV アレグロ・エネルジーコ・エ・パッショナート(約10分)

ヨハネス・ブラームスは19世紀ドイツ・ロマン派を代表する作曲家である。音楽史では、絶対音楽のブラームスと標題音楽

第3楽章 ニ短調、2分の2拍子。ソナタ形式。行進曲風のリズムに導かれ、第1主題がピアノにより力強く奏される。第2主題は第1主題とは対照的に穏やかな楽想。展開部は変ホ長調で付点を含む動機から始まる。展開部では、ヴィオラとチェロによって第1楽章第1主題【譜例3】の変形が登場し、その直後ではホ長調に転じ、今度は第1楽章第2主題【譜例4】の変形がピアノによって優美に歌われる。再現部に入り、その後弦楽器の低音による短い上行の半音階の動機から終結部となるが、その部分では第2主題が情感こめて極限までうたわれ、最後コーダはエネルギーに閉じられる。

[楽器編成] フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(大太鼓、小太鼓、シンバル)、弦楽5部、ピアノ独奏

オーチャード

のワーグナーという美学論争があったことでも知られている。また、ブラームスは古い自筆譜を収集したり、過去の作曲家の楽譜出版の校訂を務めるなど、「過去の音楽」に関心を示した作曲家でもあり、その成果は彼の作品でもしばしばみられる。

ブラームスは生涯に4つの交響曲を書き、交響曲第1番と第2番は1870年代半ば、第3番と本日演奏される第4番は

● 譜例5 第1楽章 第1主題



1880年代半ばに書かれている。これらの交響曲はいずれも動機による有機的な統一を特徴としており、また楽器編成は古典的な2管編成を基本としている。

交響曲第4番は、第1・2楽章が1884年夏、第3・4楽章が1885年夏に作曲された。ブラームスは自分の作品にあまり自信を持つタイプではなかったが、この作品も例外ではなく、この作品が人々の理解を得られないのではないかと懸念を抱いていたという。初演前は友人のあいだでもなかなか理解されなかったが、指揮者のハンス・フォン・ビューローだけはこの作品を支持した。初演は1885年10月25日ブラームス自身が指揮し、その初演の評価は予想に反して、好評を博した。

第1楽章 ホ短調、2分の2拍子、ソナタ形式。ヴァイオリンによる悲壮感だよう「3度下行」(シーソーミードーラーファ#ーレ#ーシ)の第1主題で始まる【譜例5】。第2主題は木管楽器による付点を含んだ勇ましいリズムで「3度上行」であるため第1主題と対照をなすが、共通して「3度音程」が使われているため、主題の関連性もみられる。展開部は明るい雰囲気の中開始されるが数小節を経て、展開部であるにもかかわらず冒頭と同じ調でそのまま第1主題が登場する。その後この主題はピッツィカートを用いたり調を変えていくことで変奏されていく。再現部冒頭は木管楽器によって第1主題が登場するが、音の長さは提

示部よりも拡大されている。コーダも第1主題で始まるが、冒頭とは違いフォルティシモで力強い泣き叫んでいるようにも聴こえる。最後は厳かに締めくくられる。

第2楽章 ホ長調、8分の6拍子、序奏付き。冒頭は付点を含んだ順次進行の動機がホルンによって奏され、木管楽器へと引き継がれる。基本調がホ長調でありながら、楽章冒頭がそのように聴こえず古めかしい響きとなっているのは、ホ長調の調号すべてにナチュラル記号が付き、**フリギア旋法**(ミーファーソーラーシードーレーミ)となっているためである。クラリネットとヴァイオリンによって奏される第1主題は、前述した冒頭の動機から導かれているが、ピッツィカートが使われるなど軽くなっている。第2主題は一転し、優美な雰囲気に包まれる。その後第1主題が回帰し、フォルティシモで三連符による印象的な移行句をはさむと、再び穏やかな第2主題となる。後奏ではホルンによって第1主題が奏でられ、最後は消え入るようにして曲が閉じられる。

第3楽章 ハ長調、4分の2拍子、ソナタ形式。総奏による第1主題がフォルティシモで元気よく始まる。この楽章全体を支配する小気味よさは、次に導入される短一短一長のリズムによる同音反復の動機や三連符を含む動機にも表れている。ヴァイオリンによる第2主題は軽やかでのびのびとした雰囲気。展開部は最初第1

● 譜例6 第4楽章 バッサカリアの主題



● 譜例7 第4楽章 第29変奏



主題がそのまま登場し、その後転調されたりさまざまに変化していくが、この部分では第2主題は姿をみせない。再現部は提示部で登場した三連音符を含む動機から始まり、ここでは第2主題も登場する。コーダでも第1主題が顔をのぞかせ、最後は堂々と力強く閉じられる。

第4楽章 ホ短調、4分の3拍子、パッサカリア。この終楽章の主題は、バッハのカンタータ第150番『主よ、わが魂は汝を求め』の終楽章のシャコンヌの主題をモデルにしている。パッサカリアとシャコンヌはほぼ同義の形式名で、パッサカリアとはバツソ・オスティナート（同一音形の執拗な反復）が繰り返されているうえで、上声部が連続した変奏を展開することを指す。

この終楽章は主題と30の変奏から成り、このパッサカリアの主題は通常バス声部に置かれるところ、ここではソプラノ声部に置かれている【譜例6】。第1変奏は休符をはさみながらヴァイオリンによって奏でられる。第4変奏はヴァイオリンが情緒豊かな旋律を奏でる下で、低弦であ

るチェロとコントラバスに現れる。ちなみに、このヴァイオリン声部には3度下行を軸とした第1楽章第1主題【譜例5】も盛り込まれている。もの悲しいフルートが奏でられるところからは第12変奏。そして、第14変奏はホ長調でサラバンドのリズムが用いられる。第16変奏は冒頭の主題が回帰したかのごとくホ短調でそのまま登場する。第24変奏も第16変奏同様はつきりと主題が示される。

これら変奏のなかでも特筆すべきは最後の第29変奏と第30変奏で、ここでは弦楽器にパッサカリアの主題だけでなく、第1楽章第1主題【譜例5】の素材である「3度下行」も用いられ、それらが融合された形となる【譜例7】。

ブームスは大変奏の大家であるが、この終楽章はまさにその実力がいかんなく発揮されているといえよう。

〔楽器編成〕 フルート2(ピッコロ持ち替え)、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、トライアングル、弦楽5部

まつおか・ゆき(音楽学)/桐朋学園大学、慶應義塾大学大学院修士課程(美学美術史学専攻、音楽学)を経て、現在同大学大学院博士課程在籍。専門はバーンスタインをはじめとする20世紀アメリカ音楽。